

専大文学部 ←→ 韓国・忠北大人文学部

国際交流協定結ぶ

考古学、美術史

相互研究に期待 文献史学分野で

専修大学文学部(廣瀬 玲子学部長)は、韓国の忠北大人文学部と教育・研究面での交流を推進することに同意し、組織間協定方式による国際交流協定を結んだ。

専修大学文学部(廣瀬 玲子学部長)は、韓国の忠北大人文学部と教育・研究面での交流を推進することに同意し、組織間協定方式による国際交流協定を結んだ。忠北大人文学部は、文系13学部を擁する総合国立大学で1951年に開校。朝鮮半島の中央部に位置する忠清北道の中核都市・清州市にある。文学部は英語などの語学文学科(日本語や日本文学関連の学科はない)のほか、哲学科や史学科、美術科、考古美術史学科など10学科から成る。考古学や美術史、文献史学の分野で相互研究が期待できることから、本学の歴史学科が中心となり交流を進める。文学部の国際交流組織間協定校は、日本語学科が中心となっており、交流活動を行っている韓国・湖南大学(光州広域市)人文社会学部に続き2校目。調印式は12月18日に生田キャンパスで行われ、矢野建一学長と廣瀬文学部長が協定書に署名。忠北大人文学部からは、成正鏞・人文学部考古美術史学科教授と裴柄均・同中語中文学科教授が、尹汝杓総長と金元漢・人文学部長の署名入り協定書を持参され、矢野学長らと交換した。考古学が専門の生田純之、高久健二両教授と、大林守国際交流センター長も同席した。今後は▽学生、教員、研究員の受け入れ・派遣▽共同研究▽学術資料・刊行物や情報の交換、などを予定。将来的には学生の海外実習やインターシップの実施などについても視野に入れていく。本学の国際交流協定校は、組織間協定が3カ国7機関(大学間協定は17カ国・地域21大学)となった。



▲ 右から大林センター長、廣瀬学部長、矢野学長、忠北大学の表・成尚教授、土生田・高久両教授

社会知性開発研究センターでは、文部科学省や日本私立学校振興・共済事業団などの外部機関から助成を受け、国際社会に対応した学際的な研究に取り組んでいる。文科省の「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」に採択され、今年度から開始した本学の3プロジェクトが11月と12月にシンポジウムを開催し、2018年度まで今後5年にわたる研究の方向性を示した。

社会知性開発研究センター・3プロジェクトがシンポジウム開催

「アジア消費市場のフロンティア」

アジア産業研究センター(小林守センター代表)は11月15日、「アジア消費市場のフロンティア」と題する国際シンポジウムを生田キャンパスで開催した。同センターが研究するのは、メコン諸国(ベトナム、ラオス、カンボジア、タイ、ミャンマー)におけるASEANの経済統合の影響や、ASEAN内での地域間格差。現地の中小企業の視点で調査・分析することに力点を置く。シンポジウムの冒頭、小林センター代表は「メコン地域で面の調査を進めていくが、今回はメコン地域でビジネス上、大きな影響力を持っている



▲ 趣旨を説明する小林センター代表
▲ ベトナムの現状について報告するフン講師

「ソーシャル・ウェルビーイングと経済発展」

ソーシャル・ウェルビーイング研究センター(原田博夫センター代表)主催の国際シンポジウム「ソーシャル・ウェルビーイングと経済発展」が12月6日、生田キャンパスで開かれ、基調講演と研究員4人による研究報告、質疑応答が行われた。目覚ましい経済発展をみせるアジア諸国で「人々の安心感・満足感・幸福」をどう実現していくか、

原田センター代表は「経済的発展と生活満足度の関係」をテーマに、6世紀の北方ユーラシアの情勢を概観し、鮮卑・突厥の各祖先窟の所在情報などが都へ伝達されるルートを推定し、当該時期の人流を考察した。荒井氏は「続日本紀」などの文献をもとに、渡来人によって建郡された高麗郡(現・埼玉県日高市周辺)と新羅郡(現・

と述べた。廣氏は、主力製品の粉ミルクのシェアが外資系2社に次ぎ第3位であると説明。「研究開発に力を入れ、育児相談などの無料サービスでブランド化を図った」と経営戦略を語った。後半は、ベトナム・ダナン経済大学のチン・トウイ・フン専任講師と、名古屋大学カンボジアサテライトキャンパス長のンガウ・ペンホイ特任准教授が登壇。生産拠点から消費市場へと変化をみせる自国の現状と今後の展望を、それぞれ日本語で報告した。



▲ 講演者、報告者が質疑に応じる

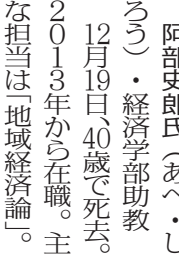
「古代東ユーラシア地域と朝鮮・日本」

古代東ユーラシア研究センター(飯尾秀幸センター代表)が11月29日、生田キャンパスで開催された。研究者や歴史ファンら151人が来場し、3ユーラシア地域と朝鮮・

世界の人流と倭国・日本。飯尾センター代表が「前身である東アジアの世界史研究センター(古代理史学)の成果と留学生」07(11年度)の成果に基づき、その対象を東ユーラシアに広げ、人流を考察した。荒井氏は「続日本紀」などの文献をもとに、渡来人によって建郡された高麗郡(現・埼玉県日高市周辺)と新羅郡(現・

鹿住教授は、遺物・遺構などの考古学的見地から東国への渡来人の流入時期とその地域での集落構造を探り、さらに剣崎長瀬西遺跡(群馬県高崎市)など3遺跡の出土品などから渡来人の生活実態を明らかにした。講演終了後、高久健二代表を務める共同研究「女性の起業における資金調達および経営支援ニーズに関する国際比較」が公益財団法人全国銀行学術研究振興財団より2014年度研究助成(経済分野)に採択された。

阿部史郎氏(あべ・しろう)・経済学部助教授は12月19日、40歳で死去。2013年から在職。主な担当は「地域経済論」。



阿部史郎氏(あべ・しろう)・経済学部助教授